The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	無数に異なる同じもの : スピノザの実体論
Author(s)	上野, 修
Citation	カルテシアーナ. 1990, 10, p. 31-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66933
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

無数に異なる同じもの——スピノザの実体論

上野　修

「……不連続な粒をなし、どれも等しい倍率で、均等な光に照らされ、正午の同じ輝きの中でおたがいに隣り合わせに並んで——すでにこれは無数の太陽のその無数だ。近かろうと遠かろうと、どの場面も同じ寸法を持ち、同じ精密さで見られているのだ、まるで各々が、見られるについての平等で時効のない権利を有しているかのように。」（ミシェル・フーコー『レーモン・ルーセル』）

スピノザの『エティカ』第一部は少なからぬ困惑を読む者に与え続けてきた。スピノザにとって実体はただ一つしか存在せずわれわれ有限存在はみなその様態にすぎぬのだが、神ともあるいは自然とも呼ばれるこの絶対に無限な実体を導出するさいスピノザは異様な論証をみせているからである。それによれば、ある属性のもとで考えられる実体と他の属性のもとで考えられる実体とはたがいに全く共通点がない。全く共通点がないがゆえにそれら無数の実体はすべて同じ一つの実体、神と呼ばれる唯一の実体であるというのである。全く異なるがゆえに同じものであるような存在。本稿はスピノザの神を、そのようないささか謎めいた存在として再考することをめざしている。

一　「実体」は二度あらわれる

『神・人間および人間の幸福に関する短論文』と題された比較的初期の著作のなかでスピノザはこう言っている。自己自身によって存在する実有・万物の原因・全知・全能・永遠・単純・無限・最高善・無限なる慈悲者等々……哲学者達は神をこんなふうに定義してきた。が、こうした規定はみな神の「属性（attributa）」ではなく、ただ神を形容する「特性（propria）」にすぎない（KV/I/7/45）。「神はなるほどこれらなしには神たりえないが、しかしこれらによって神なのではない」。なぜならこういったものは実詞を必要とする形容詞のようなもので、それ自体では「何ら実体的なものを表示していない」からである（KV/I/1/18）。ではそうした実詞にあたるもの、「神をして神たらしめる所以の属性」は何かというと、「それは、その各々がそれ自身で無限に完全でなければならぬ無数の実体のみである」（KV/I/7/44　傍点引用者）。それゆえ神は全知・全能・無限といった形容詞によってではなく、「思惟」、「延長」、その他無数に存在するに違いないあらゆる無限実体を表示するような、主語たりうる実詞によって定義しなければならない。――驚くべきことに、たしかにスピノザは、その各々がそれぞれに無限であるような無数の実体こそが神を神たらしめる属性だと言っているのである。『エティカ』冒頭の次のような神の定義は、まさしくこの奇妙とも見える要請、スピノザが「真の論理学」（KV/I/7/46）と呼ぶ要請に従っていると見ていい。

「神とは、絶対に無限なる実有、すなわちその各々が永遠・無限の一本質を表現するような無数の属性から成り立っている実体と解する」（E1D6）。

スピノザはこの定義について、自分の言う「属性」とは「それ自身によってまたそれ自身において考えられる一切のもの」という意味であり、したがって「そうしたものの概念は他のものの概念を含まない」とコメントしている（EP/2/7）。例として延長を考えればいい。運動は延長を前提するが、延長そのものは、デカルトが主張したようにそれ自身で考えることができる。それ自身で考えられるがゆえにそれは完結したある実体を表示するのである。そして絶対に無限な実有としての神に到達するには、そのように表示される「あらゆる実体」がどれも「自己の類において無限で最高完全であるということ」をまずもって証明しなければならない。そうすればそうした実体がすべて唯一の神的実体であることが明らかになるだろう（*loc. cit.*）。——こうしてわれわれは、「実体」・「属性」・「神」という三つのタームが三つ巴となって、早くもひとつの謎を形作るのを見はしないだろうか。スピノザによれば神は唯一の絶対に無限な「実体」である。しかしそれを実体たらしめている無数の「属性」は、これまたすべて自己の類において無限な「実体」である。[1] 言いかえればスピノザにおいて「実体」は二度あらわれる。あるときは無数の実体として、そしてあるときは唯一の実体として。すると神的実体は諸実体から成る複合実体だというのだろうか。それとも本当は神は全く別の実体であって、「実体」という言葉がどこかで意味をずらされているのだろうか。そもそもスピノザにおいて実体は一つなのだろうか複数なのだろうか……。

ともあれ、たしかに『エティカ』の論証は二段構えになっている。[2] いきなり神が登場するのではない。「神の他にはいかなる実体もありえずまた考えることができない」（E1P14）という最終結論にいたるのにスピノザは実に十四個の定理を経由しなければならなかったのだが、そのうちはじめの十個の定理は、思惟と延長のように相互に通約不可能な「あらゆる実体」の自己原因性と無限性の証明に当てられている。このあとようやく「神」の定義が介入し、そうした

実体がすべて実はこの唯一の神的実体であったことがいわば回顧的に残りの定理で証明される、というふうに相当手のこんだ手続きになっているのである。[3] ざっとそのアウトラインを追ってみよう。

「実体とは、それ自身のうちに在りかつそれ自身によって考えられるもの、すなわちその概念を形成するのに他のものの概念を必要としないものと解する」(E1D3)。

「属性とは、知性が実体についてその本質を構成していると知覚するものと解する」(E1D4)。

このようなデカルトふうの定義[4]を文字どおりに固守すれば、「あらゆる実体 (omnis substantia)」(E1P8) は自己原因でありかつ自己の類において無限でなければならぬことが出てくる。まず実体はそれぞれの属性のもとで「それ自身のうちに在りかつそれ自身によって考えられ」ねばならぬ以上、異なる属性の実体どうしは「たがいの間に共通点を全く持たない」(E1P2 傍点引用者)。それゆえ一方を他方から認識することはできず、因果関係をその間に認めることはできない (E1P3)。のみならず属性の差異だけが実体どうしを識別可能とする以上、同一属性を有する実体は複数は存在しえない (E1P5)。この結果、それぞれに異なる属性のもとにある実体はいずれもそれぞれに唯一であって、実体であれ何であれ他のものによっては決して産出されえず (E1P6, E1P6C)、他の何ものによっても限定されえない (E1P8D) ことになる。ということはつまり「あらゆる実体」はそれぞれに自己原因であり (E1P7D) かつ無限だ (E1P8) ということだ。——「たがいの間に (inter se)」(E1P2)、「相互に (invicem)」(E1P3D)「一つの実体が他の実体か

ら（una substantia ab alia substantia）」（E1P6）といった表現をみるにつけ、実体はここでは属性の差異によって区別され、異なる属性の数だけ存在するかのように考えられていることは明白だろう。じっさい思惟と延長のように相互に実在的に区別され、一方が他方なしにそれ自身で考えられるということがあらゆる実体の自存性と無限性の拠り所となっているのだから。

ところが突然、論証は大きな転換を見せることになる。スピノザは次のように語りはじめる。なるほど同一属性を持つ複数の実体は存在しえない。しかし、だからといって一つの実体が多くの属性を持ちえないわけではない。それどころか属性は実体の本質を構成するものなのだから、「各々のものは、より多くの実在性あるいは有を持つにしたがってそれだけ多くの属性が帰せられ」ねばならない（E1P9）。それも多くの属性が実体の中で実在的区別を失うわけではなく、あくまで各属性は、ちょうど実体がそうであるように「それ自身によって考えられねばならない」（E1P10）。この一見頭を混乱させるような定理の後にスピノザはこんな備考を付ける。

「ここから明らかなように、たとえ二つの属性が実在的に区別されたものとして、すなわち一方が他方の助けを借りずに考えられても、だからといってその両属性が二つの実有いいかえれば二つの異なる実体を構成すると結論することはできない。じっさいその属性の各々がそれ自身によって考えられるというのが実体の本性なのである。なぜなら、実体の有するあらゆる属性はすべて常に同時にこの実体の中にあったのであって、一つの属性が他の属性によって産出されることはありえなかったのであり、むしろ属性はそれぞれが実体の実在性あるいは有を表現しているからである。それゆえ一実体に多数の属性を帰することは不条理から程遠い。それどころか、各々の実有が何

らかの属性のもとで考えられねばならぬこと、そしてそれはより多くの実在性すなわち有を持つにしたがって、必然性いいかえれば永遠性と無限性とを表現するそれだけ多くの属性を持つこと、こういったことほど自然において明瞭なことはない。したがってまた絶対に無限な実有を、その各々が永遠・無限の一定本質を表現するような無数の属性から成り立っている実有（われわれが定義六で述べたように）と定義しなければならぬことほど明瞭なこともまたないわけである」（E1P10S 傍点引用者）。

いったい何が起こっているのだろうか。それまで異なる属性ごとに考えられていたはずの「実体」が今や奇妙なねじれによって神的実体の無数の「属性」に降格するかのように、またそれとともに「実体」なる名前がそのままこの唯一なる神の名へと昇格するかのようにすべてが進行しているのである。「実体」の奇妙な転移だ。「スピノザは無数の実体があると主張し、次いで実体は一つしかないと主張している」とアルキエの言うとおりであって、[5] たしかに実体は二度あらわれるのである。一度は異なる属性のもとで相互に通約不可能な無数の実体として。そして二度めはそうした諸実体をおのれの無数の属性とする神的実体として。だがアルキエがそこで非難するように「実体」という言葉が多義的に用いられているわけでは決してない。その証拠に、続く神的実体の存在証明（E1P11D）はまさしく以前の、たがいに共通性も産出関係も持たぬがゆえに実体は自ら存在するというあの定理（E1P7）にもとづけられており、そのあとの神的実体の不可分割性と唯一性の証明（E1P13, E1P14）も、やはり同様に以前の「同一属性を有する複数の実体は存在しえない」という定理を援用している。つまり、属性の差異によって相互に区別される「実体」の定理が、そのまま神、すなわち無数の属性から成る「実体」の証明根拠となっているのだ。「実体」の定義どおりの一義性が想定されて

いなければ、こんなことはありえない。それゆえ「実体」は一義的であって、しかも二度あらわれるのである。とすればこの奇妙なねじれをいったいどう理解したらよいのだろうか。

二　「属性」に背後はない

以上の問題をあらためて定式化してみよう。「実体」は初め属性の実在的差異をもとにたがいに全く共通点を持たぬ存在として区別され、まさにこの実在的区別のゆえにその無限性と唯一性を獲得できたはずなのに、その同じ「実体」がどうして今度は無数の属性を有する唯一の絶対実体になることができるのか。これである。「自己の類において無限である」存在から「絶対に無限である」存在への移行の中で生じるねじれ。この「実体」のはらむ奇妙なねじれはまさに「属性」のステイタスにかかっていると言っていい。というのも、属性の差異は初めのうちは実体の間の区別であるように見えていたのに、今や神というただ一つの実体の中における区別として語られているからである。スピノザの「属性」が多くの論議を呼んだのも不思議ではない。じっさい、もし実体の間での区別という属性の最初の用法に固執するなら、神は相互に実在的に区別される異質な無数の実体の「寄せ集め」だということになりはしないだろうか。これはだれしも考えつくことだろう。だがもしそうだったらスピノザの「絶対に無限な実体は分割不可能である」（E1P13）という定理に矛盾してしまう。

属性の地位をめぐる論争は、結局すべてこの難点の回避を動機としていると言っていい。[6] いわゆる属性の主観主義的ないし観念論的解釈によれば、属性の差異は知性の中にしか存在しないとされる。それは分析的知性が外から事物に押し付ける主観的限定にすぎない。知性は神という同じ実体をいわば色眼鏡を通して見ているだけであって、神そのもの

はそうしたさまざまに異なる見かけの背後で同一にとどまる。たしかにこう解釈すれば「無数の実体の寄せ集め」という難点は回避できるように見える。属性の持ち込む差異は、その背後にひそむただ一つの実体のさまざまな現象の差異にすぎぬのだから。

それ自体は単純な同一実体が、さまざまに色付けられ限定されて見るものに現れる。こんなふうにいったん光学的な説明がなされてしまえば、後は実在論寄りのどんな修正もほとんど同じ土俵の上で動くことになる。眼鏡ではなく神の一部をなす客観的なプリズムだと言おうが、あるいはその眼鏡は肉眼ではないがゆえに外すことができ、われわれはありのままの神をある種の抽象によって認識できるのだと言おうが、結局のところ五十歩百歩である。[7] ゲルーが正しく指摘するように、「《眼鏡》が知性のものなのか、知性外に実際に存在するものなのかは結局同じであって、それというのも、いずれにせよ属性は神を見る視覚を歪ませるものであり、神的実体それ自身は、属性を度外視しないことには認識できない非限定的存在として属性の外に投げ出されているからである」。[8] 諸属性の外、その背後に、それら属性によっては汲み尽くされえない同一者を故意にとり残すこと、そうやって互いに共通点のない実体の間の区別という最初の意味での属性を抑圧し、あの二度あらわれる「実体」の奇妙なねじれに眼をふさぐこと。これが難点回避に共通の常套手段なのだ。

しかしはたして属性に背後や彼方などというものがあるのだろうか。スピノザ自身の言明はことごとくそれを裏切るように思われる。まず属性は非限定的な絶対実体に加わってこれを相対化したり分割したりする限定のようなものではない。なぜなら属性は実体と同様「各々がそれ自身によって考えられる」(E1P10S) 以上それ自身いかなる限定も受けず、それぞれに「絶対的本性」(E1P21 傍点引用者) をもつのだから。また属性は知性によって外から実体に押し付け

られるものでもない。なぜなら「知性の外にあっては、実体あるいは（定義四により）同じことだがその属性、およびその変状のほかには、多なるものを相互に区別しうる何ものも存在しない」（E1P4D 傍点引用者）と明言されているように、あるいは「知性のうちに想念的に（objective）含まれているものは必然的に自然の中に存在しなければならない」（E1P30D）と言われているように、スピノザははっきりと属性を知性の外にある差異、それも実体の差異に等しい実在的差異として考えているのだから。それに、そもそも知性は、たとえそれが神の無限知性であっても属性の彼方を見やることはできない。なぜなら「現実に有限な知性も現実に無限な知性も、ともに神の属性と神の変状とを把握しなければならず、そのほかには何物をも把握することがない」（E1P30 傍点引用者）のだから。最後に、神自身も属性を離れてその彼方に存在することはできない。なぜなら「神の永遠なる本質を展開するその属性が、同時に神の永遠なる存在をもまた展開する」（E1P20D 傍点引用者）のだから。したがって、結論としてこう言わねばなるまい。属性に背後というものは存在しないし、属性を度外視してしまえばあとには何も残らないのだと。ジョアキムの言葉を借りれば、スピノザの理解する属性は存在するものの実在的な特質として「実体とぴったり重なって（coextensive）」いるのである。[9]

「眼鏡」や「プリズム」は忘れよう。そうすれば属性を単純な同一実体の多様な限定と見る偏見から自由になれる。「限定」という言葉はスピノザにとって「様態」にのみふさわしい。逆に実体は属性という無限な表層にぴったり重なっているのであって、属性なきところ実体は存在しない。だがそうした属性が無数に存在し、その各々が「それ自身において完結したもの、ないし他のいかなる特質の項にも還元不可能なもの」[10]であるとき、神がその属性の数だけある無数の実体に分解しないといういかなる保証があるのだろう。属性の差異を神の単なる現れに還元しないで、しかも神を

ばらばらな無数の実体の寄せ集めから救うこと、それは可能だろうか。それともマルティノーの言うようにそれは「解決の望みのない問題」なのだろうか。[11]

三 「実体」に数はない

しかしよく考えてみると、どうして神が「無限の多のただの《寄せ集め》へと解体して」[12]しまわないのかといぶかるそうした疑義は、こういってよければ「実体」をあまりに実体化してはいないだろうか。なるほど実体をエレア派の「有」のように単純で差異を持たぬ存在と想定してしまえば、属性の差異による実在的区別から属性の数だけの実体が帰結するのは避けられないし、神は文字どおりその「寄せ集め」になってしまうだろう。そうなるとこの不条理な帰結を回避するには、属性の差異を「理性的区別」、つまり単に知性の中だけの区別に解消するしか手がなくなる。これは今見たとおりだ。ところで、実体をそんなふうに「単純な実有」と前提すれば結局そうした主観主義的解釈に陥ってしまうということ、これは実はスピノザ自身が、すでに『形而上学的思想』の中で自ら確認していたことであった。

スピノザはそこで、神が合成不可能な「単純な実有」であるというスコラ哲学のテーゼを紹介しながらその証明をしてみせている（CM/II/5/258-259）。神が諸実体から複合されるとしてみよう。すると「それらの実体は必然的にたがいに実在的に区別される以上、その各々はまた必然的に他の助けなしにそれ自身で存在しうることになる」。それはその実体の数だけ神が存在しうるということを意味する。なぜならそれ自身で存在しうるということは神と同等の存在だということだから。しかし「これほど不条理なことは言われえない」。それゆえ神は「諸々の実体の結合や合一から複合されるものではない」。そしてこの神の単純性をもとに、スピノザは「われわれが神の諸属性の間に設ける一切の区

別は理性的区別以外の何ものでもなく、これら属性は実際にはたがいに区別されない」（傍点引用者）と結論する。ごらんのとおり、これはまさに主観主義的解釈の結論である。

だがそれは明らかにスピノザ自身の取る立場ではない。先に見たとおり、スピノザは反対に属性の差異をあくまで「実在的区別」として維持し、属性によって区別される実体はすべてそれ自身で存在する自己原因であるとする（これはまさに「これほど不条理なことは言われえない」と形容されている事柄そのものだ）。この鮮やかな相違はとりもなおさず、スピノザが「単純・複合」という発想とは全く無縁なところで実体を考えている証拠ではないか。属性ごとに区別される「実体」であろうとあるいはそれらの属性から成る神的な「実体」であろうと、スピノザの実体はいずれも「単純な実有」などではない。したがってそれは全体にもその構成諸部分にもならないのである。[13] 神とその属性との関係を「全体とその部分」のように考えることほど見当違いなことはない。

そこで全く頭を切り替えてこう考えねばならない。そもそも「寄せ集め」が前提としているような数的差異というものをスピノザの「実体」は持ってはいない、実体には数がないのだと。数えるとはどういうことか。スピノザは言っている。「単一性（unitas）」とかその対立概念である「数多性（multitudo）」といったものは、いずれも「ある事物を、それと類似しあるいはそれと何らかの点で一致する他の事物から分離するための思惟の様態」にすぎない（CM/I/6/245-246）。じっさい「われわれはものを共通の類に還元した後でしかそのものを数の概念のもとに考えることはできない」のであって、例えば手にした一枚の銅貨と銀貨は、それが「貨幣」という同一名称で呼びうる限りにおいてはじめて「二つ」と数えることができるのである。ものを一とか唯一とか呼ぶのも同じで、それは「そのものと同じ類の他のものを考えた後でしか」可能でない。しかし神の本質については「何ら一般的観念を形成することができない」のだか

ら、それを一とか唯一とか名付ける者は「神についての真の観念を有せず、あるいは神について不適当な語り方をしている」のである（EP/50/239-240）。神は数えられない。神はもはや「単一性」として捉えられるものですらないのである。これと同様、神を構成するとされる無数の属性、ないしそうした属性の差異によって相互に区別される無数の実体もまた「数多性」として捉えることはできない。じっさいもし実体が多として数えられるとしたらそれは共通する何らかの「類」ないし「種」のもとでのみ可能なわけだが、このことは、異なる属性を有する実体が「それ自身によって考えられ」（E1D3）かつ「たがいの間に共通点を全く持たない」（E1P2）というスピノザの規定に明白に反するからである。

それゆえスピノザの実体にはじめから数はないのだと言おう。数がないということはすなわち、スピノザの実体は「種と類」にも「部分と全体」にも無縁だということである。[14] 実体はたしかに属性によって実在的に区別されるが、しかしそのように区別された諸実体を、あたかも「実体」という一般観念のもとで種や個体を数えるようには数えることはできないし、ましてや神的実体を諸実体の「最高類」のように考えることもできない。同様に、無数の実体が集合して神という「全体」を形成すると考えることはできないし、また単純で単一な神が諸々の実体という「部分」に分割される恐れもない。そもそも「実体」は絶対に無限な神的実体と解されようと、属性の差異のもとで相互に不可通約的な実体と解されようと、その定義は一義的で数量というものを含まない。それゆえこの一義的に定義された本性から帰結する実体の存在にも数はない（cf. EP/34/179）。つまり二度あらわれる実体は数のうえでは区別されないのである。

「無数の属性から成り立つ実体」という表現を「単一性」や「数多性」の表象の外で理解すること。種的同一性や数的同一性の外で実体を思考すること。しかも定義不可能で否定的にしか知られぬ不可知の神としてではなく、属性にお

いて余すところなく知られる実在として実体を思考すること。これがスピノザの要請なのだ。[15] それゆえ今後は神の唯一性を「単一性」と混同したり、あるいは属性の無数性を「数多性」と混同したりしないよう注意しよう（たとえそうした表象の助けなしに思考するのが困難をきわめるとしても）。スピノザは、自分はこの属性の無数性を「絶対に無限な実有の観念」から導いたのであって、「三つ、四つ、あるいはもっと多く」といった数多性から導いたのではないと断っているのである（EP/64/278）。だがそれにしても、そのように数を持たぬ「実体」が二度あらわれ、そこに背後を持たぬ属性の無数性という契機が介在していることに変わりはない。たがいに通約不可能な無数の実体が、まさにその無数の差異によって「ただ一つの同じ」実体であるということ、それはいったいどういう事態なのだろうか。

四　無数に異なる同じものとしての神

「実体」は二度あらわれる。あるいは同じことだが、「属性」は二度、すなわち一度めは無数の実体の間の差異として、二度めはただ一つの実体の中の差異としてあらわれる。一度めは属性の各々が、たとえば思惟実体、延長実体のようにほとんど互いに独立な実体そのものであるように見え、二度めには同一の神的実体の内なる多様性に見える。こうした二度の出現はたしかにわれわれの通常の思考を不安にさせるものだ。だがスピノザの「幾何学的」方法がもっぱら定理の肯定の積み重ねだけで進行するとすれば、一度めの肯定が二度めに否定されるはずはあるまい。この二度の出現、一義的な「実体」の二重化はどのみち回避するわけにはいかないのである。われわれはそこに踏みとどまってみよう。そして各々の属性をそのまま数的に区別される実体とみなすことも（諸実体の寄せ集めという逆理）、あるいはまたそれを単一な実体の多様な現われとみなすことも（主観主義的解釈）等しく避けることにしよう。じっさい一度めの属性は

数的に区別される諸実体間の差異、二度めの属性は単一な実体の諸特性と解するなら、もはやそこには何の一義性もなくなってしまう。[16] われわれに必要なのは、実体の二度の出現をいずれも肯定すること、一方を他方に還元せず、それを数的差異や数的同一性の思考から解き放つことだ。だからここはスピノザの定義の一義性を額面どおりに受け取ろうではないか。「実体」と「属性」はたがいに意味において異なるとはいえ、いやおそらくはそのゆえに、指示においては結局二度にわたって同じ一つのものを指しているのではないだろうか。じっさいスピノザ自身、この二つの言葉は「同じ一つのもの」を指示する二つの名だと注釈しているのである。

「《実体とはそれ自身においてありまたそれ自身によって考えられるもの、言いかえればそれの概念が他のものの概念を含まないもの、と私は解する。私はまた属性をも同じことに解する。ただ属性という言葉は実体にそうしたある一定の本性を帰する知性を考慮に入れて用いられるという点が違うだけである》。この定義は私が実体や属性をどう解しようと思っているかを十分明瞭に説明しているはずです。しかしあなたたちはどうして同じ一つのもの(una, eademque res)が二つの名で表わされることができるのか、私が例を挙げて説明するように望んでおられます。［…］第一の例。イスラエルと言えば第三番めのユダヤ族長のことと私は解します。そしてこの同じ者を私はヤコブとも呼びます。彼は兄の踵を掴んで生まれたからヤコブという名が付けられたのです。第二の例。平滑とはすべての光線がなんらの変化なしに反射するところのものと私は解します。私はまた白ということをも同じことに解します。ただ白という名称は平滑なるものを見る人間に関連しての呼び名であるという相違があるだけです」(EP/9/46 傍点引用者)[17]。

スピノザの言おうとしていることに曖昧さはない。実在は「実体」と「属性」というともに一義的な二つの概念の交錯がはじめて浮かび上がらせることのできる認識対象であって、いずれか一方の呼び名だけでそのものを正しく提示することはできない。そしてそれらが意味するのはただ、「実体」があるならそこに必ず或る還元不可能な特異性の知覚、すなわち「属性」がなければならぬという一義的な事態のみである——およそこういうことだろう。したがってもし実在が概念に到達するとすれば、それは、「実体」・「属性」という二つの名がそれを「同じ一つのもの」として指示するときでしかない。そう、かの神の定義、「その各々が永遠・無限の一本質を表現するような無数の属性から成り立っている実体」というあの定義は、まさにそういう指示装置以外の何ものでもないわけである。そこで残る問題はただひとつ、この定義の中で二つの名を結びつけている「無数の（infinita）」という言葉、および「成り立っている（constituens）」という言葉、これを論証の展開のなかで理解することである。われわれが第一章で引用した問題の多いあの備考、「実体」の奇妙なねじれをはらむ定理十の後の備考を解く鍵はここにしかない。

さて「無数の属性から成り立つ」というこの神の定義は二つの要素を含んでいる。まず属性の無数性。そして属性の実体的差異。スピノザは〈属性の無数性〉を、「各々のものは、より多くの実在性あるいは有（esse）を持つにしたがってそれだけ多くの属性が帰せられる」という定理（E1P9）に基づけている。神は「絶対に無限の実有」なのだから絶対に無限な実在性ないし有をもたねばならず、それゆえ無数の属性から成り立っているのでなければならない、というのである。一度めにあらわれる「実体」から二度めにあらわれる絶対に無限な「実体」へと移行するさい、問題になっているのはある種の量、一義的な有ないし存在の最大量であることは明らかだ。他方〈属性の実体的差異〉の方は、「一つの実体の属性はいずれもそれ自身によって考えられねばならない」という定理（E1P10）に基づけられている。

諸属性はたとえただ一つの神的実体を構成するにしても、だからといって「実体」として相互に区別される資格を失うわけではない。属性は神の中でも依然、相互に何の共通点も持たぬ差異を提示しつづけるのであり、その各々は実体と「同じこと」と解される（EP/9/46）資格を保持する、というわけである。一義的な存在の量と、相互に何の共通点も持たぬ実体的差異。均質な量と異質な差異という考えからすれば一見両立しないように見える二つの要素が、ある特異な思考のなかで結びつけられていることは確かだ。だがそれはどのような思考なのだろうか。

実体とその特性といった思考でないことは言うまでもない。形容詞のような特性をいくらたくさん重ねたところで、その実体がより多く実在するわけではない。特性が前提とする実詞として実体の実在性を表示し、それをその実体性において、つまり「それ自身で考えられる」特異性において提示できるのはスピノザの意味での属性のみである。しかし実体を実体として表示するものが属性をおいてほかにないとすれば、いやしくも「実体」と呼びうるものはすべて（たとえそれが神的実体であったとしても）互いに共通点のない属性ごとに「実体」と認知されるほかない。スピノザの言うように「実体」と「属性」は「同じ一つのもの」の二つの名であり、「実体」たりうるものは各「属性」ごとにそう名指されねばならぬのだから。とすれば、属性の無数性とは、一義的な「実体」の無数に異なる反復でなければいったい何であろう。互いに通約不可能な無数の属性の各々はおよそ「実体」と考えうるものを、こう言ってよければそのつどそっくり「実体」として反復するのであり、その無限反復の外に「実体」なるものはない。じっさい、もし属性の各々が実体として知覚されず「それ自身によって考えられ」ないなら、あるいはもし属性が神的実体の中でその不可通約的な特異性と実体的差異を失ってしまうなら、どうしてそれぞれの反復がほかならぬ「実体」なるものの反復だと分かるだろう。それゆえこう言わねばならない。無数の属性がその無数の差異において一義的な「実体」を無数に反復する

のだと。そしておそらく、スピノザが神にふさわしい実在性の最大量として考えているのはこの実体の無限反復としての属性の無数性なのだ。なるほど「反復」という言葉はスピノザにはない。けれども、実体的差異の無数性を同じ一つの実体の最大存在量と同置するこの怪物的思考は、それ以外にどう理解のしようがあるというのだろう。差異と一義性が結びつくそこに実体の無限反復として見出される「同じ一つのもの」、それこそがまさにスピノザの神、すなわち実体なるものの「絶対に無限な」存在そのものにほかならぬのではないだろうか。[18]

同じものの無数に異なる反復、あるいは無数に異なるもののそのつど同じ反復（通約不可能な差異なしに実体の反復はありえず、しかも反復は「同じ一つのもの」の反復なのだから）。[19] この無限反復から「成り立っている（constituens）」実有、それがスピノザの神である。「実体」・「属性」という二つの名の交錯が無限反復の可能性を指し示すとき、これを名指す第三の呼び名がすなわち「神」であって、神はそうした反復される実体と別な実体なのでは断じてない。要するに、無限に反復されている限りでの「実体」、これが神なのである。「神すなわち神のあらゆる属性（Deus, sive omnia Dei attributa）」（E1P19; E1P20C2）と言われるときの神と無数の属性との同置、あるいは、あらゆる属性が「常に一緒になって（simul）この実体の中にあった」（E1P10S）と言われるその並置的同時性、こうしたスピノザの表現は、まさに神が異なる属性ごとに無数に反復される実体であってそれ以上でも以下でもないことを示唆してはいないだろうか。

われわれは、スピノザが単にキリスト教的人格神を否定したという程度で驚いてはいられない。スピノザの神は、単一性と数多性、類と種、本体と仮象、起源と派生、つくるものとつくられるもの、原型と写しといったお馴染みの思考、結局は差異に先立つ同一者から始めるようなそうした一切の思考をその根底から動揺させるのである。「自然の中には

ただ一つの実体しか存在せず、その実体は絶対に無限なものであり、それゆえそのような〔諸実体の差異を識別するための〕標識を求めても無駄である」(E1P10S)とスピノザは言うのだが、それは決して属性が実体的差異の表示をやめて一つの実体のなかに溶融するという意味ではない。むしろ実体は相互に不可通約的な無数の反復としてしか存在せず、起源も原型も数もないそうした絶対反復そのものとして実体は「ただ一つしか存在しない」ということ、これがスピノザの真意ではないだろうか。そうでなかったなら、例えば次のようなテクストをどう理解すればよいだろう。

「自然はそれ自身によって知られ、他のものによっては知られない。自然は各々が自己の類において無限かつ完全な無数の属性から成り立っている。それら属性の本質には存在が属しており、したがってそれら属性の外ではいかなる本質もいかなる存在もない。このようにして自然は、壮麗かつ賛美すべき唯一の神の本質と正確に一致する」(KV/App/116 傍点引用者)。

無数の属性の「外」では本質も存在もない。無数の属性、ないしその各々が神と等しく自己原因たりうるような実体の無限反復からなる自然がすなわち神だというのだ。だからこそスピノザはある書簡(EP/36/185)で、「自己の類においてのみ無限定的かつ完全であるような何かが自己の能力によって存在する」ということと「絶対に無限定的かつ完全な実有の存在」とを同じ一つの事態とみなし、「この実有を私は神と名付けるのです」と言うことができたのである。

――こうしてわれわれはあの二度あらわれる「実体」の奇妙なねじれを理解することができる。一度めのそれは反復の一単位としての「実体」であり、二度めのそれは無数に反復されている限りでの「実体」。そしてこの実体の反復の

一回一回を区切っているのが「属性」である。二度の出現を通じ「実体」と「属性」は定義どおりの一義性を失いはしない。それらは異なった二つの名として「同じ一つのもの」を指示しつづけ、そのことによって前代未聞の反復を思考させるようになる。やがて「同じ一つのもの」が論証のなかで絶対反復の可能性として姿をとるとき、スピノザはそれこそが「神」と名付けうる唯一のものであったことをわれわれに示すのである。

無数に異なる同じもの。そうしたスピノザの神は「同じ一つのもの」であるとはいえ、もはや無数の差異の外では存在せぬ同じもの、類的同一性・種的同一性・数的同一性のいずれをも逃れ去る表象不可能な同一者、多を統一する超越の高みすらもたず絶対反復のなかにのみ内在する一者である。スピノザの神がどこか神秘的で捉えがたいとすれば、それはこの神が不可知の雲の中に隠れているからではない。逆にあまりに隠れているところがなさすぎるからである。じっさい、神的知性の視野を埋め尽くすであろう無数の属性は実体をそのつど異なる同じものとして反復し尽くし、そのあとにはもう何も残らないのだから。いまドゥルーズにならって「異なるものが異なるものに対して差異そのものによって関係付けられるようなシステム」を「シミュラークル」と名付けるならば、[20] スピノザの実体、「神」とも「自然」とも呼ばれるこの絶対に無限な実体は、まさしくその外に何ものも残さぬ「絶対シミュラークル」なのである。[21]

付論　無数に異なる同じものとしてのわれわれ

属性の実体的差異ごとに反復するものだけが実体であるとするなら、「思惟する実体と延長した実体とは同じ一つの実体であって、それがあるときはこの属性のもとに、またあるときはかの属性のもとに理解される」(E2P7CS　傍点引用者)のだとスピノザが語っても、もはや驚くことはあるまい。また「同じ一つの実体」を第三の実体として思惟と延

長の背後に探し求めても無駄だということ、これも言うまでもなかろう。しかし反復の威力は神の一定の表現、神的実体の様態であるわれわれ人間にも及んでくる。なぜなら実体が反復されるのと同様に、われわれの身体と精神すなわち「延長の様態とその様態の観念」もまた「同じ一つのもの」であって、「ただこれが二つの仕方で表現されているだけ」(*loc. cit.* 傍点引用者)なのだから。

こうしてスピノザは、精神と身体の実在的区別とその結合というデカルトの心身問題を、反復という奇妙なやり方でついでのように解決してしまう。精神と身体を異なる二実体として立てたあと、デカルトはそれらを結合するのに不可思議な神の技をあてにするほかなかった。あの有名な脳内の「小さな腺」[22]について語るとき、デカルトはいったいどんな結合を考えることができたというのだろう。しかしスピノザによれば、われわれの精神と身体は反復される「同じ一つの実体」の様態、つまりそれ自身実体とともに反復される「同じ一つのもの」にほかならない。精神と身体は結合されるのでも合一するのでもない、ただ同じものの異なる反復(あるいは異なるもののそのつど同じ反復)があるだけだ。この反復を離れて私であるところの「同じ一つのもの」はどこにも存在しないということ、これは神の場合と同様である。いわゆる心身の平行もこうした反復の効果でしかない。「自然を延長の属性のもとで考えようと、あるいは思惟の属性のもとで考えようと、あるいは他の何らかの属性のもとで考えようと、われわれは同じ一つの秩序すなわち諸原因の同じ一つの連結を、つまり同じものが両方で帰結するのを見出すであろう」(*loc. cit.* 傍点引用者)。

残る問題は、どうして思惟と延長、精神と身体なのか、ということだ。じっさい属性は無数になければならないのに、われわれの認識しうるのはスピノザ自身が認めるようにただ思惟と延長の二つだけなのだから。スピノザの答えはこうである。

「各々のものは神の無限な知性のなかで無数の仕方で〔つまり無数の属性にわたって〕表現されますが、しかしそれを表現するこれら無数の観念は個物の同じ一つの精神を構成することができず、むしろこの個物の無数の精神を構成するのです。これら無数の観念の各々は、私が『エティカ』第二部定理七のその備考で説明したように、また第一部定理十から明らかなように、相互に何らの連結も持たないからです」(EP/66/280 傍点引用者)。

信じがたい話かもしれない。精神の本質はただ「自然のなかに現実に存在するある客体の本質から思惟属性のなかに発生する観念(すなわち想念的本質)の存在という点にのみある」(KV/App/119)。つまりある属性内の客体に思惟属性のなかで対応する観念(およびその観念の観念)がその客体の精神である。しかるに同じ一つの個物ないし様態は相互に通約不可能な無数の属性にわたって無数の「客体」として反復されている。それゆえその各々についての観念すなわちその個物の精神もまた無数に反復され、かつ「相互に何らの連絡も持たない」ことになる。つまりは同じ個物が、無数の異なる精神を有するのである(*loc. cit.*)。「相互に何らの連結も持たない」ような「無数の精神」をもち、無数の知られざる「客体」をおのが身体とするところの「同じ一つのもの」、つまりは無数に異なる同じもの、それがこの私なのである。だから私が無数にある属性のうち思惟と延長しか認識しないとしても不思議はない。いま私の知っているこの精神は無数に反復される観念のうち延長の一様態とその観念だけを客体とするものであって、それ以外の私の無数の精神とはなんらの連結も持たないのだから。(23)

この奇怪とも見えるスピノザの人間論は、しかし人間を精神と身体、魂と肉体の二元対立としてみる通常の思考に眼

の眩むような一撃を与えずにはおかない。精神が身体を支配するのでも、また身体が精神を支配するのでもない。両者の間に共通なものは何もなく、したがって一方から他方への影響といったものはありえないのだから。むしろ精神と身体とは同じ力能の異なる反復、ないし異なる力能のそのつど同じ反復であって、だからこそ、機会原因論者が呼び出すような超越的第三項の媒介などなくても同じ一つの個物を構成できるわけだ。同様に、魂が個体に同一性を与えるのでもなければ、肉体が魂を個体化するのでもない。われわれは無数のからだと無数の魂の反復体、われわれ自身の知りえぬ無数の力能の反復体であり、そのうちのどれかを同一性の範型として特権化することはできないのだから。スピノザの「壮麗かつ賛美すべき」自然の中では、われわれの一人ひとりは神がそうであるように無数に異なる同じもの、一切の表象的同一性を逃れる無限反復なのである。「神の本性の必然性から無数のものが無数の仕方で〔…〕生じなければならない」(E1P16) とする定理、および「神が自己原因と言われるその意味において、神はまたすべてのものの原因である」(E1P25D) というスピノザの言葉は、まさにこのような神の反復のわれわれにおけるそのまた反復として理解されねばならないであろう。旧来の道徳論がスピノザの倫理学（エティカ）によっていかに激しく襲われることになるか、およそ察しがつくわけだが、これについては稿を改めて論じたい。

注

スピノザの著作については略号化し本文中に示すことにする。例えば E1 は『エティカ（*Ethica*）』第一部、次のDは定義、Pは定理。その後に続くDは証明、Cは系、Sは備考を示す。そして KV/I/7/45 は『神・人間および人間の幸福に関する短論文（*Korte Verhandeling van God, de Mensch en deszelfs Welstand*）』第一部第七章（ゲプハルト版全集第一巻四十五頁）を、CM/II/5/258 は『形而上学思想（*Cogitata Metaphysica*）』第二部第五章（同全集第一巻二百五十八頁）を、EP/50/239 は書簡

第五十（同全集第四巻二百三十九頁）をそれぞれ示す。

（1）スピノザが「属性」を「実体」と同等の資格において考えていることは明らかである。「属性（あるいは他の人々の名付けるところによれば実体）はもので」あり、「それはそれ自身によって存在する一実有、従ってそれ自身を認識せしめそれ自身を示現するものである」とスピノザは言っている（KV/I/7/46）。

（2）Cf. Martial GUEROULT, *Spinoza I, Dieu (Éthique, I)*, Aubier-Montaigne, p. 109.

（3）これは『神・人間および人間の幸福に関する短論文』の第一付録でもすでに基本的には現われていた証明手続きである。Cf. KV/App/114-116.

（4）デカルトは「延長は形や運動がなくても理解し得るし、思惟は想像や感覚がなくても理解し得る」としこれを実体の「主要属性」と呼んでいる（Descartes, *Principia Philosophiae*, I, art. 53）。そしてそうした属性によって知られる事物は、「一方を他方なしに明晰判明に理解することができる」だけで互いに実在的に区別された実体であることが分かると言う（*ibid.*, I, art. 60）。スピノザはこのようなデカルトの定義を少なくとも形のうえでは踏襲しているのである。

（5）Fernand ALQUIÉ, *Le rationalisme de Spinoza*, puf, 1981, p. 131.

（6）ゲルーがこの論争を的確にまとめ、主観主義的属性解釈を綿密に批判してみせてくれている。本章における以下の議論はこれに負うところが少なくない。Cf. GUEROULT, *op. cit.*, App. No 3, pp. 428-461.

（7）前者は Eduard von HARTMANN, 後者は Kuno FISCHER の見解。いずれもゲルーのパラフレイズによる。Cf. GUEROULT, *op. cit.*, pp. 356-357, p. 455.

（8）GUEROULT, *op. cit.*, pp. 460-461.

（9）Harold H. JOACHIM, *A Study of the Ethics of Spinoza*, New York, 1901, p. 25.

（10）*Ibid*, p. 26.

（11）J. MARTINEAU, *Study of Spinoza*, London, 1882, p. 185, cité in GUEROULT, *op. cit.*, p. 434. ジョアキムもこれを「諸属性は《究極の》特質——それぞれがその類において完結した神の本質形式——でないか、それとも神は《否定》を含む、すなわち絶対的に一者ならぬ多の寄せ集めであるか」という解決不可能な二律背反と捉え（JOACHIM, *op. cit.*, p. 106）、「実在の本性に関するスピノザの一般理論には深刻な欠陥が存する」（*ibid.*, p. 104）と評している。

(12) JOACHIM, *op. cit.*, p. 104.

(13) 実際、『エティカ』にはこの種の「単純性」に立つ議論は全く存在しないし、実体なり神なりを「単純な実有」とする箇所は一つとして見当らない。だからこそスピノザは属性の差異を「理性的区別」に解消する必要もなかったのである。事実、「二つの異なった属性の存するところそこにまた二つの異なった実体が存する」ことになりはしないかというシモン・ド・フリースの疑義（EP/8/41）に対し、スピノザは決して、実体そのものは単純な実有であって、属性の持ち込む区別は理性的区別にすぎない、とは釈明しなかった。むしろスピノザは後で見るように、互いに異質な属性が無数に帰されるのが神的実体にふさわしいことだと答えていたのである（EP/9/45）。

(14) 「絶対に無限な実体は無限に多くの仕方で知られ、あるいは表現され得るが、しかしこのことは神ないし自然が一個の集合実体であることは意味しない。神ないし自然を属性という諸部分から複合された一つの統一だとか、合成された総体だとかいうふうに考えてはならないのである。こういうたぐいの空間的ないし《延長的》思考は不正確であり、これがスピノザ理解を困難にしているのである。［…］部分と全体という関係はアリストテレスの実体とその特性、あるいは種と類といった関係と同様、スピノザの神の見方を説明するのには何の役にも立たないだろう」（Alan HART, *Spinoza's Ethics, Part I and II*, Leiden, 1983 p. 25）。

(15) 神がいかなる類の種でもないということはスコラ哲学の主張でもある。しかしスコラ哲学はそこから神の定義不可能性を導きだす。これが隠れた神の否定的認識という主張にリンクすることは容易に見て取れるだろう。だがスピノザはそういう種と類という定義の合法性基準そのものが誤っていると批判し、神は属性において隠れなき存在として自らを示現すると主張するのである。Cf. KV/1/7/46.

(16) アルキエはまさにこうした二者択一の袋小路に落ち込んでいる（cf. ALQUIÉ, *op. cit.*, p. 123）。彼は「大きな当惑」を感じる。それというのも「それ自身で考えられた属性の各々が実体であるなら、二つの属性がどうして二つの実体でありえないのか分からないし、無数の属性がどうして唯一の実体を構成しうるのかも分からないから」である。あとは属性に「特性」の意味が残っているとするほか手がないが、そうするには「文字どおりの主張から離れて、諸属性よりも存在論的により深い、不可知のかつ万物に共通であるような基底という超越神の考えに立ち戻り、この神のうちに、またこの神によってのみ属性は存在するとせざるをえないのである」。合成された神が不条理なら背後の不可知の神しか選択はない、というわけだ。こうし

てアルキエはスピノザに自然と超越神との間の動揺、実体の両義性を執拗に臭ぎだそうとするのだが、無駄なことである。

(17) この書簡はしばしば、「諸属性は単に同じ本質を表現する異なった言葉にすぎない」とする主観主義的解釈の論拠に引かれている。Cf. H. A. WOLFSON, *The Philosophy of Spinoza*, I, p. 154; R. J. DELAHUNTY, *Spinoza*, London, 1985, p. 122; *Spinoza: Oeuvres complètes*, Bibliothèque de la pléiade, Gallimard, 1954, p. 1496, note 27 par R. MISRAHI. だがその誤読は明白だろう。ゲルーの指摘（GUEROULT, *op. cit.*, p. 438）をまつまでもなく、テクストは諸属性が同じ実体についてのさまざまに異なった呼び名だと言っているのではない。属性と実体とが同じものの二つの呼び名だと言っているのである。

(18) ゲルーの巧みな言い回しを借りるなら、「属性の各々はそれぞれ根源的に異なった仕方でかの実体そのもの」なのであって、それというのも「そうした諸々の差異はこの実体の完全性を構成する差異」だからである（GUEROULT, *op. cit.*, p. 167）。

(19) 「あるいは」によるこの言いかえは避けられない。なぜならここで名指されようとしている存在は、「種において何かと異なるものは、あるもののうちでその何かと異なっているのであり、そしてこのあるものはそれら両者に共通のものであらねばならない」という種的差異という意味で「異なる」わけではないし、また「種において互いに異なるものは同じ類の内にある」という類的同一性の意味で「同じ」なのでもないのだから。そもそもスピノザの名指そうとしている存在は、アリストテレスの「なにものであろうと、およそ存在するものであるかぎり、他であるか同じであるかのいずれかである」という基準を逸脱しているのである（cf., アリストテレス『形而上学』第十巻第三章、第八章、岩波文庫、下、六十五頁、八十一頁）。アラン・ハートがスピノザの属性問題に関して指摘しているように、スピノザの場合「存在は特異かつ唯一であって、〈同じ〉と〈異なる〉とにゆきわたっている。存在は〈同じ〉と〈異なる〉の双方と異なり、またこれら二つの形式も互いに異なるのだが、にもかかわらず存在は両者を包含するのである」（HART, *op. cit.*, p. 32）。属性という無数の通約不可能な差異について「同じ一つの」存在が言われるということ。存在の一義性だ。ちなみにドゥルーズはスピノザをドゥンス・スコトゥスに続く存在の一義性の開拓者とみなしている（Cf. Gille DELEUZE, *Spinoza et le problème de l'expression*, Minuit, 1968, pp. 150–152; *Différence et répétition*, puf, 1968, p. 59）。

(20) DELEUZE, *op. cit.*, p. 355.

(21) シミュラークルの概念については、次も参照。「二つの定式を考えてみよう。《互いに類似しているものだけが異なる》、《諸

々の差異だけが互いに類似する》。一方は先行する類似ないし同一性から出発して差異を考えさせようとするのに対し、もう一方は反対に類似のみならず同一性すらをも、地が不揃いであることの産物として考えるよう誘う。そのかぎりで、世界の二つの読み方が問題となっているのである。前者の定式はまさに写しないし表象の世界を定義し、世界をイコンとして提示する。それとは反対に後者の定式はシミュラークルの世界を定義し、世界そのものをファンタスムとして提示するのだ」(Gille DELEUZE, *Logique du sens*, Minuit, 1969, p. 302)。「無数の属性から成り立つ」スピノザの実体は、ここで《諸々の差異だけが互いに類似する》と言われているその逆説的な類似そのものだと言ってもよかろう。

(22) Cf. Descartes, *Les passions de l'âme*, I, art. 31.

(23) ある客体の観念であるということがどうしてその客体の精神であることと同じなのか、観念であることと観念を持つこととはどう違うのか、こういった問題に関しては拙稿「身体の観念あるいは精神——スピノザにおける精神とその認識の起源的定位」(『カルテシアーナ』第三号、一九八一年)を参照。

(文学部助手)